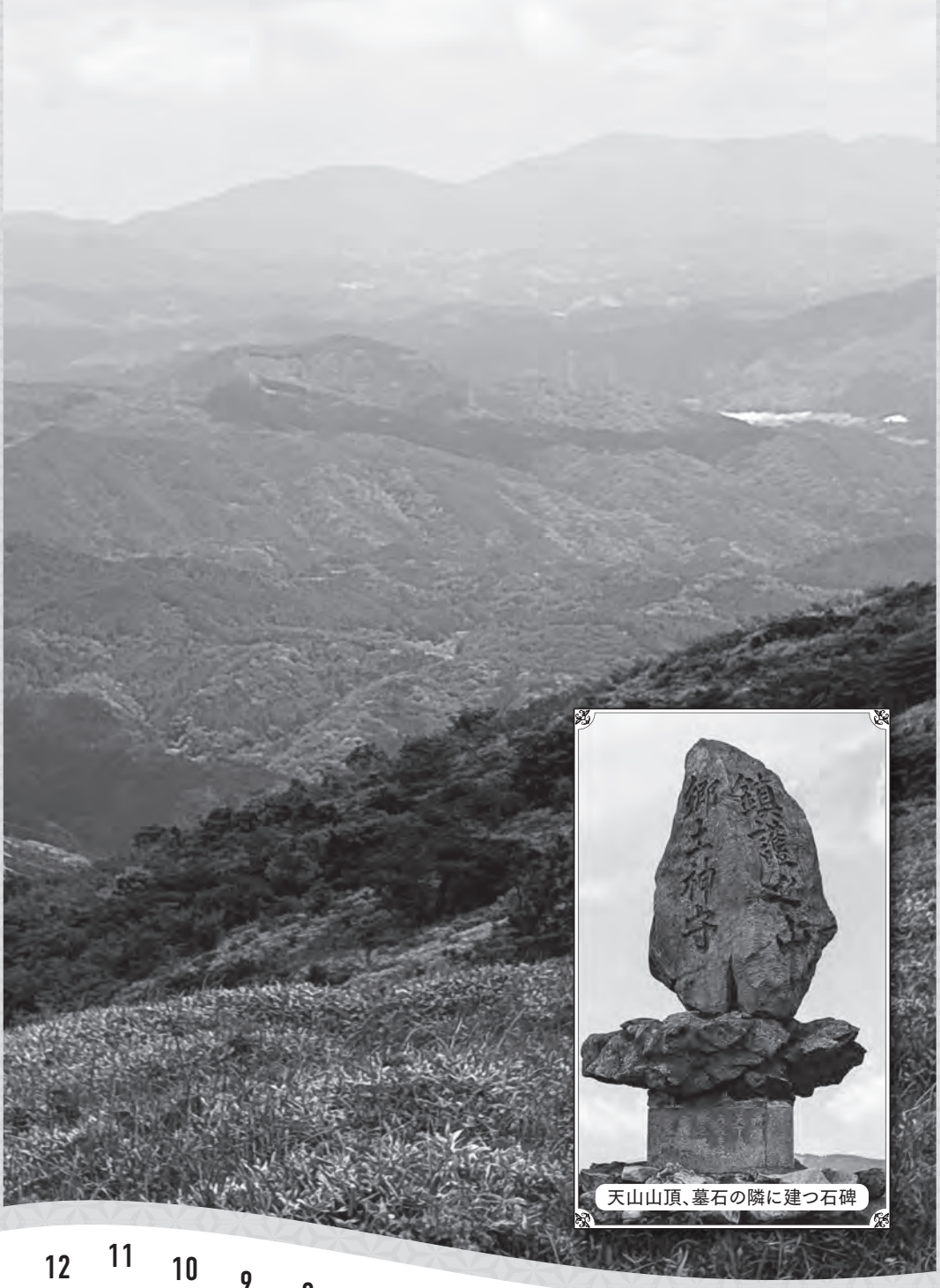
令和８年
7
No.119

寺子屋だより

※題字／森川芳聲



天山山頂、墓石の隣に建つ石碑

脊振山系
天山（てんざん）山頂［佐賀市］から望む
※詳しい解説は12頁に掲載しています

もくじ

2 巻頭言
「皇統断絶の危機」を凌いだ歴史…山口 秀範
3 母のこと伯母のこと⑥……髙見澤 玉江
4 こんな日本人がいた……吉川 理夫
6 小柳陽太郎先生のご著書と思い出……金井 幹雄
7 この一首……黒岩 真一／與島 誠央
8 鄙爺日記 その⑦……猪部 敬彦
9 東京裁判下の竹山道雄③……廣木 寧
10 TERAKOYAふぉとれぽーと
11 〝あちこちde寺子屋〟のご案内
12 山とものがたり(7) 余録

巻頭言

「皇統断絶の危機」を凌いだ歴史

代表世話役　山口 秀範

ようやく訪れた皇室典範改正の機運

本稿執筆の時点で、皇族数確保策を巡る立法府の総意が示され、これから政府による皇室典範改正案の作成に移ります。本誌が届く頃は国会審議に入っていることを期待します。

戦後の皇室では男子皇族数の減少が次第に顕著になり、将来の安定的皇位継承を万全にする方策が懸案でした。ようやく占領後遺症の一つが解消されることは慶賀の至りであり、九仞の功を一簣に欠くことの無いよう、慎重な法案文言の取り扱いが求められます。

旧宮家男系男子の養子案

百二十六代を重ねる皇統にこれまで何度か危機が訪れました。古代では二十五代武烈天皇がお子様の無いまま崩御され、都から遠く離れた越前（福井）まで探して後を継いでいただいたのが二十六代継体天皇です。武烈天皇の曽祖父の祖父であった応神天皇まで遡り、そこから五代下った方へと皇統は引き継がれた訳です。

江戸時代にも百十八代後桃園天皇で断絶の危機が到来しました。この時は四親等遡った東山天皇の時代に「閑院宮」を新設しておられたために、その三代目が光格天皇として即位され、そこから今上天皇まで真っ直ぐ継承されて今日に至っています。

この度の「旧宮家の該当者を現存する宮家に養子として迎える」案は、右の歴史に倣って皇統の安定的永続に資する妙案でしょう。

皇位継承が極めて困難な時期

永い皇室の歴史の中では、お血筋の問題以外にも継承が危ぶまれる事態を招来しています。その最たるものは戦国時代の天皇方で、従来皇室を経済的に支えた将軍失脚後の戦国時代後期に皇室財政は窮乏を窮めました。

百四代後柏原天皇は、崩御された父君・後土御門天皇のご葬儀もままならず、ご自身の即位式までに二十二年を要しました。次の後奈良天皇時代はさらに厳しく、御所の築地は破れ放題で幾度も泥棒に悩まされました。加えて戦乱下に洪水・凶作・悪疫流行と世は乱れ、民の苦しみは増しました。

愚なる身も今さらにそのかみのかしこき世世の跡をしぞ思ふ
いそのかみふるき茅萱の宮柱たてかふる世に逢はざらめやも

これは後奈良天皇の御製ですが、そんな時代にあってご自身は「愚かなる身」ではあるが、昔の素晴らしかった世世を偲びながら、やがて復興のなる盛時に逢うまで力を尽くそうという強靭なご意志が伝わります。御自ら「般若心経」を認められて各地の神社へ奉納なさり、「民の父母」でありたいと祈り続けられたのです。

天皇の位を投げ出されても不思議でないご境遇下、「国の平安と民の安寧」を願い続ける皇室の伝統を受け継いで乗り切って来られたのでしょう。

「皇統消滅」最大の危機

今日まで我々は日本の国柄の象徴として皇室を仰ぎつつ暮らしていますが、実は皇室消滅の最大の危機を八十年前に経験しました。

それは「敗戦」とその後の被占領という未曽有の事態でした。昭和二十年九月二十七日、昭和天皇は米国大使館に連合軍最高司令官マッカーサー元帥を訪ねられます。その様子は『マッカーサー回想記』が伝えています。

私は天皇が、戦争犯罪者として起訴されないよう、自分の立場を訴えはじめるのではないか、という不安を感じた。連合国の一部、ことにソ連と英国が出した最初の戦犯リストには、天皇がいちばんさきに記されていたのだ。

滞日一ケ月を経たマッカーサーは、天皇が戦争犯罪人として裁かれ極刑ともなれば軍人は再び武器を取り、国民もゲリラ戦を起こすので、連合国は百万の将兵を日本へ送らねばならなくなると恐れ、天皇を守ろうと考え始めていたのです。

天皇の口から出たのは、次のような言葉だった。

「私は、国民が戦争をなしとげるにあたって、政治、軍事両面でおこなったすべての決定と行動に対する、全責任をおう者として、私自身をあなたの代表する諸国のさばきにゆだねるためにおたずねした」私は大きい感動にゆさぶられた。死をともなうほどの責任、それも（略）明らかに天皇に帰すべきではない責任を引きうけようとする。この勇気にみちた態度は私の骨のズイまでもゆり動かした。

この会見に唯一同席した通訳の奥村勝蔵によると、天皇はご自身のことには無頓着で、国民の飢餓を救うために食糧援助をと要請され、風呂敷包みで持参した皇室財産の証書類を元帥に差し出された由です。奥村の証言によると、

それまで姿勢を変えなかった元帥が、やおら立ちあがって陛下の前に進み、抱きつかんばかりにしてお手をにぎり「私ははじめて、神のごとき帝王を見た」と述べて、陛下のお帰りのときは、元帥みずから出口までお見送りの礼をとったのでありました。

この時点で一歩間違えば、古来多くの王政が潰えたように我が国から天皇が姿を消す懼れは現実のものでした。それを阻止したのは「神のごとき帝王」の伝統を代々受け継いで来られた方と、その威力を正しく理解し得た敵将軍の出会いにあったのでしょう。

かくして、天皇を中心に戴く「国体」は護られたのですが、一方でマッカーサーは皇室の弱体化には容赦なく、十一宮家の臣籍降下は強行されたのです。今回の改正はその占領政策からの回復です。然らば、この後に続く本丸は愈々憲法改正だと国民挙って肝に銘ずる秋でしょう。